

「わたしたちの秤^(はかり)、神の秤」

マタイによる福音書 7:1-6
イザヤ書 54:10

2025 年8月3日
野村 友美 師

<平和主日によせて>

今日は8月最初の日曜日、キリスト教会の暦では平和を思う主日です。

もちろん今日に限らず私たちは平和を願い、祈り求めています。ただ特に8月は、広島と長崎に原爆が投下された日、そして終戦記念日を迎える特別な月です。戦争がどんなに悲惨なことを引き起こすか、どれほど多くの方々が争いの犠牲にされてきたかを思い起こして、平和を願う気持ちを新たにしていまいりましょう。

本当に、私たち人間の歴史には、争いのない時がありません。いつもどこかで国と国が、民族と民族が、グループや個人どうしが争って、お互いを攻撃し合っています。最近は SNS なんかで、お互いに顔も名前も知らない相手に、激しい言葉で誹謗中傷を繰り返すことが問題になっています。

そうやって争いが起きる原因は、いろいろとあるでしょう。利益や権力の奪い合い、怒りや恨みの積み重ね、意見の食い違い。いろいろある原因の、その根っこにあるのはどれも「自分こそ正しい」という感覚ではないかと思います。

自分が利益を得ること、力を手に入れることこそ「正しい」。相手に怒りをぶつけること、恨みを晴らすことこそ「正しい」。自分の主張こそが「正しい」、間違っているのは相手の方だ。

それを意識しているかどうかはともかく、「自分

こそ正しい」という思いがぶつかり合って、私たちを争いに駆り立てるのではないのでしょうか。

自分の「正しさ」を押し通して、相手を無理矢理にでも従わせようとして、人は争いを起こすものです。いつの時代もそうやって争い続ける人間たちに、今日のイエス様の言葉は時代と場所を超えて投げかけられています。

<人を裁くな、とイエスは言う>

人を裁くな、あなたたちも裁かれないようにするために。あなたたちが裁くその物差しで、あなたたち自身も裁かれる。人の目の中のおが屑にこだわる前に、まずは自分の目の中の丸太を取り除け。

いつになく厳しい言葉で、イエス様は今日の教えを語っておられます。つい先まで、「明日のことまで思い悩むな」と優しく話していたイエス様とは、まるで別人のような迫力です。「それだけ大事なことなんだ!」と、イエス様は力を込めて訴えておられるのでしょう。自分の思う「正義」で誰かを裁くとき、人はどこまでも自己中心で残酷になれる。そのことを、よくよく知っておられたからだと思います。

イエス様が生きておられた時代のイスラエルも、いつ戦争や暴動が起きるかわからない緊張感の中にありました。宗教も文化も違う大国、ローマ帝国の支配下におかれて、重い税金を課せられて、暴動を起こさないようにといつもローマ軍に監視されている。そんな日常の中で、人々は鬱屈した気持ちを抱えて過ごしていたんです。イエス様たちが暮らし

ていたガリラヤ地方では特に、ローマに反抗する
気風が強かったそうです。イエス様が生まれる前
から、人々は何回も反乱を起こしては鎮圧されて
いました。

周りの国々との国境に近いガリラヤ地方は、戦争
が始まればどこよりも先に、争いの舞台になる危
険があった場所ですから、そこで暮らす人々は

「いつでもすぐ戦えるように」と、普段から
心構えをしていたんじゃないでしょうか。

一方的な侵略や暴力による支配、理不尽な攻撃に
対して、怒りをもって立ち上がり抵抗するのは、
決して間違いじゃありません。

自分たちの命と尊厳を守ることは、むしろ必要だ
と言っていいでしょう。

ただ「自分たちこそ正しい」という強い思いは、
相手の存在そのものを「悪」にして、徹底的に叩
き潰したいという欲望に、いつの間にかすり替
わってしまうものです。

だからイエス様は「裁くな」と言われました。

自分たちは正義だ、相手が悪だと裁きを下して、
相手の命や尊厳まで思いのままにしようとして
はいけない。そんな資格も権利も、あなたたち
にはないのだから。そう伝えるために、イエス様
は目の中にあるおが屑と丸太のたとえ話をなさっ
たんです。

そして、こう言われました。

偽善者よ、まず自分の目から丸太を取り除け。

そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目
からおが屑を取り除くことができる。

おっしゃることはよくわかりますけど、「偽善
者よ」とはなかなか厳しい呼びかけですね。

ここまでイエス様は、施しや断食を見せびら
かしたり、人目につくところで祈りたがる人
のことを「偽善者」と呼んでおられました。

そういう人たちは大体、信仰深そうにふるま
うユダヤ教の専門家たちや、施しをする側の
裕福な人々、つまり社会的な地位が高い人た
ちでした。

このときイエス様のお話を聞いていた人々、イ
エス様の弟子たちや、貧しさの中で必死に
生きていた民衆とは、いわば真逆の立場にい
た人々です。

ですが今回、イエス様はあえて目の前の弟
子たちや民衆に向かって、「偽善者よ」と
呼びかけておられます。「偽善者」と呼ばれる
危険がない人は、誰もいない。

そのことを、イエス様はここで改めて人々に
突きつけたんです。

「偽善者」と訳されている言葉は、元々は仮
面を被って芝居を演じる役者を意味するもの
でした。自分自身の偏ったところや間違いを
棚に上げて、誰かを「悪」だと決めつけると
き、私たちは神様の仮面を被って、神様を演
じようとしているようなものです。

でも私たち人間は神様ではありませんし、神
様にはなれません。なのに、人が神様のよう
に振るまおうとするなら、それこそ神様の権
威を横取りする「悪」以外の何ものでもない
でしょう。

「自分の裁く裁きで裁かれ、

自分の量る秤で量り与えられる」

とイエス様が言われるのは、そういうことな
んです。

<わたしたちの秤、神の秤>

この厳しい言葉の締めくくりに、イエス様はさらに過激に聞こえる不思議なたとえ話を添えておられます。

神聖なものを犬に与えるな。

真珠を豚に投げてはならない。

「イエス様、犬より猫派ですか？」と思わず聞いてみたくなるところですが、どうもそういうことではなさそうです。

当時のイスラエルでは、犬も豚も律法で「汚れた動物」だと見なされていました。ですから、当時の人たちにわかりやすい譬えとして、犬と豚が登場しているんでしょうね。

「豚に真珠」ということわざが、まさにこのイエス様の言葉から生まれたというのは、割とよく知られている話だと思います。

ここでイエス様が言おうとしておられるのは、「裁く」と「判断する」のは違う、ということでしょう。本当に正しいことは人間にはわからないのだから、良いとか悪いとかを自分で判断しないで、状況に流されていなさい。

悪いことだと思っても、その結果は神様に任せて、何も言わずに見逃しなさい。なんていうことを言っているんじゃないんだよ、とイエス様はこのたとえ話で補足しておられるんです。

神様に属する聖なるもの、真珠のように高価なものは、その価値がわからない相手に差し出しても意味がない。あなたたちが愛をもって、寛容にふるまったとしても、相手がそれを正しく受け取れる状態じゃなかったら、かえってお互いにとって良くない結果を引き起こすだろう。その見極めは必要だということを、イエス様は最後に注意なさっているんです。

何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうイエス様は、今日の話の前に教えておられました。もし誰かが、他の人を理不尽に扱って傷つけたり、わがままに振るまって困らせていたら、「人を裁いてはいけないから」と見て見ぬふりをするのが、神の国の在り方かどうか。

明らかに間違った方向へ進もうとしている誰かを、「人を裁いてはいけないから」と放ったらかしにしておくのが、神様の正義かどうか。

戦争や紛争の中で、幼い子どもたちまでが虐殺されている。そんな状況を「裁いてはいけないから」と、ただ黙って見ていることが、神様の愛にかなうことなのかどうか。

「違う、そうじゃない」と判断する知恵と力を、私たち人間はちゃんと神様から与えられているはずです。

だから私たちはいつだって、与えられている知恵と力を尽くして、目の前の物事を見極める必要があるでしょう。その上で、「裁くな」とイエス様は言っておられるんです。

自分の目の中に、丸太が入ってはいないか。自分の思う「正義」は、独りよがりじゃないか。

いつも自分自身に問いかけながら、お互いの状態に目を注ぐようにと、今日のイエス様の言葉は呼びかけています。

私たちはどうしても、自分の目の中の丸太に気がつけなかったり、気がついても取り除けないでいる時があるものです。

精いっぱい考えて、向き合って、それでも間違ってしまうことも、きっとあります。そん

な私たちの弱さも限界も、神様はすべて知っていてくださる御方です。だから預言者イザヤを通して、神様はこんな約束を差し出してくださいました。

「山が移り、丘が揺らぐこともあろう。

しかし、わたしの慈しみはあなたから移らず
わたしの結ぶ平和の契約が揺らぐことはない
あなたを憐れむ主は言われる。」

(イザヤ書54:10)

長い歴史の中で、私たち人間は失敗や間違いを数え切れないくらい繰り返してきましたし、それは今でも変わりません。

この世界を創られた神様の思いを無視して、好き勝手にふるまって、神様が創られたものや人を欲望のままに扱って、傷つけて、踏みにじってきました。

時には神様の仮面を被って、自分たちこそ神だと言わんばかりにお互いを裁き合って、争いを引き起こして、今なお多くの犠牲を生み出しています。平和なんて、まるで遠い世界の夢物語なのかもしれません。

神様の秤の一方に、私たち人間の罪がすべて載せられたとしたら、もう一方には何をどのくらい載せたら釣り合うのかわかりません。

どんなに罰を受けて、苦しんで悲しんで傷ついて、とても足りないでしょう。それでも。

「わたしの慈しみはあなたから移らず、わたしの結ぶ平和の契約が揺らぐことはない」と神様は私たちに約束してくださいました。

この約束のとおり、神様は私たちの罪を量る

秤のもう一方に、独り子であるイエス・キリストの命をお載せになりました。

私たちではとても釣り合わせられない秤を、神様が犠牲を払って釣り合わせてくださったんです。果てしない争いを生む私たち自身の秤じゃなくて。

すべての人を慈しんで生かして、平和を生み出す神様の秤に、私たちすべての人が載せられたんです。

だから私たちがすべきことは、自分たちの秤を振りかざして、どちらが正義か悪かと争い合うことでは決してありません。

何を載せても釣り合わないほどの私たちの罪の代価を、イエス様の苦しみと命で支払ってくださった、神様の愛の秤に従うことです。それは神様が私たちに注いでくださっている慈しみを知って、お互いを慈しむことです。神様が結んでくださった平和の契約を思い起こして、平和を築くために精いっぱい知恵と力を尽くすことです。

「人を裁くな」と言われたイエス様に従って、お互いの「正しさ」の違いを超えて、お互いの命と尊厳を大切にすることです。

平和を思う8月の最初の日曜日、私たちは今日、改めて「人を裁くな」と言われたイエス様の言葉に心を向けましょう。

争いを生む私たちの秤ではなくて、平和を生み出す神様の秤に従っていくことができますように。一刻も早く、私たちのこの世界から、すべての争いが捨て去られますように。お祈りいたしましょう。